

工事常識 材料の研究と着眼点

建築材料見積の研究 (3)

林 有 一

經驗の深い林氏が、筆に委せて長い間の研究を此所に趣味的に書き出さんとするのである。總て工事の經營は着眼點が大切である。二月號より精讀を乞ふものである。(編者)

【天正十年の頃】 天下の英雄織田信長が、木曾の檜に着眼し、敬神勤王の大義を奉行すべく伊勢大廟の神宮造營材に選定してより、俄然天下の名木たる盛名を博するやうになり、爾來今日に至る迄、神宮造營材は木曾の檜に限られてゐるのである。

明治大帝の盛徳鴻業を崇敬追慕して、神靈を齋き祀る神宮奉祀の輿論一齊に起るや、幾多の名士が東奔西走、遂に政府を動かして國費五百二十一萬九千餘圓を以て、大正四年より同九年に至る約五ヶ年の日子を費して、明治神宮は造營されたのであるが、神宮奉祀調査會に於て慎重審議の結果、建築用材として、木曾の檜が採用された。

これに就て伊東忠太博士が、紛々たる異論を排して、所信を斷行したる熱心振りは

「材料の研究と着眼點に關して大に學ぶべき所がある。

伊東忠太博士所論の大要は

「世の中の事情の移動と共に、生活の有様や執務の方法が變化する、住宅や事務所云ふ事に就ての思想觀念が變化する、即ちいつくなく自然に、住宅や事務所の様式が改善され變更される、若しも世態が千年變らなければ建築も千年變り様がない、アフリカ内地の蠻族は開闢以來少しも文化に進歩を見ないから、其醜陋なる住居も亦開闢

以來、すこしも變化しないのである、要するに建築の様式は或る物好きな一個人に由て、任意に捏造さるべきものでなくしてやむを得ざる社會の要求の爲に、自然に變化すべきものである。

今や吾人の神社に對する觀念は、古來何程變化し來つたか？ 祭祀の禮式は古來何程變化したか？ 我國民の神に對する觀念は、古今渝りないと思ふ、然らば如何にして、神社建築の様式が變り得やうぞ、只參拜の仕方は多少違つて來て居る、例へば洋服に靴さいふ姿で、立禮を行ふものが多くなつたことなどは其一つである、この要求を充す爲には、拜殿を石敷にし廻廊も石敷とし、祭典に參列する者の爲に椅子を備ふる用意もするのである、然し社殿なるものは

神靈の在ます處である、神靈の家である民衆の家ならば要求の新なるに従つて變化もするが

神靈に新しき要求はない
従つて様式は變化し得ない。」云々。

中央本線木曾大井驛で、汽車を乗り捨て、木曾川へ向へば、奥渡さいふところがある、支流の阿木川や和田川が、本流に合流する地點から約千尺の上流に、木曾川を横ぎつて製造された大堰堤がある。